農と食のコラム

聞く耳あってこその交渉

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

先日、某俳優養成講座の生徒たちによる『法王庁の避妊法』なる劇を見た。篠田達明による同名の小説を原作に、飯島早苗・鈴木裕美が戯曲化したもので、1994年に初演されて以来数々の劇団で上演が繰り返されており、名戯曲とされているらしい。

「オギノ式」として知られている月経周期を踏まえた避妊法を、産婦人科医・荻野久作が発見するに至るまでの、荻野と妊婦、助手、看護婦、奥さんなど荻野を取り巻く人々が繰り広げるドラマである。この「オギノ式」はローマ法王庁が初めて認めた避妊法であるとかで、戯曲は『法王庁の避妊法』というドキリとするタイトルがつけられている。

本稿は劇の中身には関係しない。終わってからの演じた生徒たちと観客との交流会での話である。交流会に参加した観客は私を含めて十数人とはいえ、私のようなごく普通のおじさんの他に、演出家、脚本家、俳優、バンド演奏者等も交じっており、交流会でのそれぞれの演劇に対するコメントが実に面白く、興味津々であった。特に印象深かった一つが、演出家・脚本家ナガノユキノさんの「演劇の原点は相手のセリフを聞くところにある」とのコメントである。ともすれば自分のセリフを話すことだけに精いっぱいになって、相手の話が耳に入ってこない。形だけの演技となり、間が取れなくなるばかりでなく、場の雰囲気も盛り上がりを失ってしまいかねない。そして相手のセリフを聞くにとどまらず、「自分の内側に起こっていることにも耳を澄ませることまでを要求したい」とのコメント。奥は深い。

これに関連して思い出したのが、やはり演劇関係であるが、劇作家・木村快さんから以前聞いた話である。木村さんは劇に登場する人物すべてについて逐一、履歴書のようなものを作るという。どこで生まれ、家族がどのような人たちで、いかなる環境で育ったのか等々、背景を積み重ね、人物像を明確にしたうえでセリフを考える。「劇では説明ができない。役者のセリフがすべてであり、一言のセリフでも観客が理解し納得できるような必然の言葉を紡いでいかなければならない」と語る。

話は大きく環太平洋連携協定（ＴＰＰ）交渉に飛ぶ。日米首脳会談が4月24日に開催されたが、共同声明が首脳会談後のＴＰＰ担当閣僚による協議結果を踏まえて25日の午前中に出されるという異例の事態となった。結果的にはＴＰＰについて「前進する道筋を特定」したとの共同声明に落ち着いた。この間の米国の態度は「米国には相手に譲るという発想がまったくない」と経済官庁幹部が嘆くほどに、一方的、強圧的で、日本農業の事情などに目をくれることもない。従属ではなく、アジアの平和と協調をリードするのであれば、まずは相手に耳を傾け、理解に努めることが出発点ではないか。米国との溝はあまりに大きすぎる。

＜表紙・目次へもどる＞